

No. J2205 インドネシア農村女性の伝統的薬草療法利用と ウェルビーイングに関連する人類学的研究
京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 博士後期課程 杉野 好美
本研究は、伝統的薬草療法ジャムウの利用実態を調べ、特に公的医療から置き去りにされがちな農村部女性に着目し、ジャムウ行商婦人というインフォーマルな「医療専門家」が、女性たちのウェルビーイング向上に果たす役割を明らかにする。 伝統医療の中で特に知名度の高いジャムウは予防医療の点からも期待され、固有の薬草文化として文化的に象徴的な治療法である。その中でジャムウ行商婦人が作るジャムウ飲料は女性に支持されている。 新型コロナウイルス感染症などの影響から国内で文献調査や投稿論文、ブックレットの執筆を行い、その後、現地調査を再開した。 文献調査から、母子保健が重点課題で、妊産婦死亡率や乳児死亡率、5歳以下の死亡率が他のASEAN諸国に比べ高かった。ジャワ人女性は仕事と家庭の二重の役割が求められ [Burnner 1988, 中谷 2003]、ジャワの慣習やイスラーム教の戒律による制限やタブーがあった [小國 2019, Beers 2001]。そして、ジャムウはジャワの伝統的な健康観に寄り添っていた [Van Esterik 1988, Yoshida 2000]。 現地調査では、(1)ジャワの女性、特に思春期や授乳期の女性の状況と利用するジャムウ、(2) コロナ禍やコロナ後のジャムウ利用の状況を把握した。調査地の保健サービスポストを訪問し、授乳期の女性の様子を見聞きした。伝統的市場では女性の各ライフステージで利用されるジャムウがあり、月経、産後、授乳期のジャムウの利用が多かった。コロナ禍のジャムウ利用では、ワクチンや治療薬が開発していない時期、人々はジャムウや薬用植物に関する既知を活かし、喉や咳に効くものや免疫力を高めると言われている薬用植物を組み合わせ薬草茶として飲用し、感染予防に努めていた。実際、ジャムウ行商婦人や市場の薬草店の店主の話からもコロナ禍でジャムウや薬用植物の需要が高まっていたようだ。 今後、女性のライフステージで特にジャムウの利用が多く見られた思春期や授乳期の女性にアンケート調査を行う予定である。